

「半年前の約束を  
また」

2010/07/16

「大王は、明日はどう過ごされるんですか？」  
「んん？ オレ、かあ……………」

ことり、目の前に置かれたマグカップから、ほんのりと湯気が立っていた。

仕事終わりのことだ。秘書の鬼の子はお盆を体の前で抱え、私の顔を見つめてくる。

私はマグカップを両手で包み込んで、口を付ける。

ほわっと吐き出す息まで甘そうな、美味しいココアだった。それだけの間を持ってはまだ、鬼の子はじつと私の顔を見ている。

これは答えなきやいけない流れなのかな、と早めに見切りをつけて、逆に聞き返す。

「そういう君はどうなの？」

「私？ 私ですかー、あの、実は、ですね！」

それからその子はべらべらと、明日の予定だけでなくいっしょに過ごす相手のことまでいろいろと話してくれた。やっぱり、思った通り。話を聞いてほしいからこそ、そのきつかけとしての質問だ。分かりやすく素直で、少し騙されやすいところをのぞけば仕事もできる優秀ないい子だった。

うん、へえ、などと時折相づちを混ぜて、私は話とココアを楽しんだ。

他人の恋愛話はおもしろいし、のろけ話だつて嫌いじゃない。

こんな風に、幸せそうな顔をされるとこちらまでつられて気分が明るくなる。

「それはそれは。いいねえ、若いね青春だねえ」

「えへー、そうですか？」

にやにやと笑って、からかう素振りを見せても怒りもしない。素直に、喜んでくれる。

本当に素直で真っ直ぐな子なのだ。真っ直ぐすぎて、逆にこちらがうろたえてしまうくらい。勝てないなあって、何だかついつい苦笑してしまった。

「じゃあ、明日は、いい日になるといいね。はいこれ。いつもどうも」

「あ、砂糖、どうでした？ もう少し控えめがいいです

か？」

「ううん、いいいい、これでいい。まあ欲を言えば、もうちよつとミルクほしいかな」

「善処します」

恭しく、私からカップを受け取る彼女は軽い足取りで扉に向かった。

そのまま出ていくかと思つたのに、扉に手をかけたところでふと振り返つた。

「それで、大王は？ どうするんですか？」

「……………えつと、」

その質問は忘れてくれたらいいと思つたのに。

彼女の幸せそうな様子に流されたのか、それとも。

「……………人に、会いに行くかも」

どうして答える気になつたのか、理由は、自分でもわからなかつた。

彼女がきゅ、と口を結んで、目を細めて、微笑む。

どきりとしてしまうくらい深く見通すような、見透かすような表情だった。

優しい顔だった。

「お互い、良い賽日を」

そう告げて。

ぱたりと、扉が閉まり、私は部屋に一人になった。

一人残された私は、椅子にだらしなく座り込んで、行儀悪く足を机にのせた。

味気ない天井の柄に見飽きてしまつて、目を閉じる。

夢を見た。

本当はただの、記憶の回想。

いつかの出来事を、見たいシーンだけ取り出して大切に、大切にひとつずつ、確認していくような作業。

胸の奥を痛くするような記憶ばかりだったけど、でも大切つて、つまりはこういうことなのだろう。

私は静かに、記憶の中に沈んでいく。

例えば、一番思い出すのは何でもない、ありふれたいつものやり取りだったりする。

仕事の合間。準備の途中。居残りの最中。

いつでも隙さえあればお菓子を食べたがる私を、彼はいつでも叱ってくれる。

私はこっそり隠れた振りをしてたけど、本当は全部気付いていた。

気付いていて、振り下ろされる帳面は避けない。

叱ってくれるのもうれしかったし、私に容赦ない彼も好きだった。

怒る彼を何とかなだめようと、言葉を重ねるやり取りも。

差し出すお菓子を断られることはない。

こんなもの、と呆れた顔をするくせに、いつも、いつでもいつだって、彼は私の差し出すものを静かに受け取ってくれるのだ。

それがどんなに私を浮かれさせたのかを、きつと、最後まで彼は知らなかった。

どんな想いで私があの飴玉を差し出したのかも。

どんなに、祈るような気持ちでいたのかを。

「覚えていて、くれますか」

意識の中、ぱちりと一度瞬く。

一瞬で記憶がめくられる。場面の転換。時間の早飛ばし。じゃあこれはきつと、還ることを自覚し出した彼との時間だ。

嫌に真剣な表情で、彼が私の前に立っていた。

なんでもない風を装おうとしているけど、ダメだよ、それじゃあ。

帳面を体の前で抱いている、その指先に不自然に力が籠っている。

そこに気が付いてしまう自分が私は嫌で、突然の彼の質問にきよとんととしてしまっただけから、もう、笑うしなくなってしまう。

「もちろん」

……………覚えていないくせに。

思考は荒れたのに、それを表に出さないだけの自制はあったのだから本当、嫌になる。

表情は彼を許そうと和らいだ。

きつと取り繕うことの出来た、優しげな態度とは裏腹に、思考は駄々っ子のように喚いていた。

……………すべて忘れてしまっただけなのはそちらのくせに。

……私が覚えていてもそのことがわからなくなつてしまふのは君の方。

……私が覚えていても、そのことが、どうせわからなくなるくせに。

……どうせ。

だから嘘で良かった。適当で良かった。

この場しのぎの言葉で構わなかった。

それなら簡単に口にすることが出来た。

「私は覚えてるよ。………忘れない」

忘れることなんか一度も、ない。

決してない。

いつでも私は、置いていかれる側だから。

私の答えに彼がほうつと息を吐き出す。

ゆるむ表情が憎たらしくて、きつと、私は泣きたく思っていた。

「それでも私は………」

ふつと、目を開く。

相変わらずの味気ない天井、ただし部屋はいつの間にか暗闇に沈み、明かり一つ見あたらない。

再び目を閉じて、開く。

こちこちと時を刻む、針の音に耳を澄ませた。

その針がまた進んで、今日と明日の境界を跨ぐその瞬間。待ち望んでいた、昨日と今日の境が混じる刻。

私は足を下ろして勢いよく立ち上がり、その部屋を出て飛ぶように走る。

あつという間に川を越えた。

もう少しも待ちたくない。我慢したくない。

彼女の言葉が蘇る。

よい賽日を。

閻魔の賽日。  
お休みの日。

今日だけとは、言い訳をするにはこれ以上ない都合の良い日。

だから私は、仕事も立場も置き去りにして。  
現の君に、会いに行く。

そつと降り立った、部屋の中も真つ暗だった。  
高温多湿の、不快指数の高い空気が懐かしい。いつもこの  
場所は、この季節はこんな居心地だ。

珍しいことに真夜中、日付を越えてまだ間もない頃なのに  
彼は眠り込んでいた。  
いつもならもう少し夜更かしだ。だから私はだいたい彼が

寝るのを待つてから部屋に侵入して、少しばかり、記憶をい  
じる。

ベッドではなく机に、突つ伏して寝ているのは鬼男君だっ  
た。

正確には以前、鬼男君であつた魂だ。  
今は別の名前と姿を持つて、生きている。

「また、遊びに来たよ」

ふざけて言つたつもりでも、言葉尻が堪えきれず震えてい  
た。

苦く、笑う。

それでもなんだかいっぱいいっぱいで苦しいような胸の内  
を、落ち着けることなんてできそうにない。

だつてずつと会いたかつた。

ずつと、ずつと会いたいと思つている。

鬼男君が無事に転生できたのに、それなのにあきらめきれ  
ずになつた。

ずつと、思つていた。

その往生際の悪さが、この、一年に二回の訪問だつた。  
賽日だけ、私は、私が現世に降りることを許していた。

鬼男君に会うことを。

本当は、いけないことだ。だつて鬼男君の魂はずでに巡つ  
たのだ。ならば自由にならなければ。私一人のわがままに、  
ずつと付き合せていてはいけない。

そして死者を裁く者が、たったひとりに執着するなんてあり得ない。

あり得ないことなのに、私は彼に惹かれてしまった。

だから一年に二回、賽日の日、冥界のすべての業務が停止する、その日だけ。

その日だけは、と私は私に言い聞かせ、この訪問を続けていた。

さて、と私は息を吐く。

今日一日は鬼男君といられる。私は彼の遠い親戚で友人みたいな存在。そういう刷り込みをしている。それはいい。まだ何をするのか決めていないのも。いつもの調子だと朝ご飯と一緒に食べながらなんとなく決めるから。

それより今晚、私はどこで寝るのか。

「ベッド……でも、いいかなあ」

いつもは鬼男君が寝ている隙に侵入して、勝手に予備用らしい布団を敷いて寝る。

今日は、鬼男君、机で寝てるし。

っていうかなんでこんなところで寝てるんだろう。まさか新卒の健康法とか。そんなわけないか。でもそれならベッドに寝かせてあげた方がいいのかな。そうすれば私も、いつも

みたいに勝手に布団敷いて寝ればいいだけだし。

思ってたら、と鬼男君を見たら、不意に髪をいじりたくなつた。

鬼男君は転生して、姿が変わった。鬼ではなく人間だ。角はないし、髪は黒い。以前よりも質感は柔らかそうに見える。不意にそれを確かめてみたくなる。

鬼だった頃も、人間になってからも、鬼男君は基本的に頭を撫でられることは嫌いだ。

嫌いというか、苦手なのかもしれない。だつて撫でてあげると拗ねた様な、どう反応したらいいか困ったような、そんな様子でじつとしているから。まるで構われ慣れない猫みたいだ。でも、逃げない。大人しくしていてくれる。

その、どうしたらいいのかわからなくて、困っているような感じが楽しくて仕方ないんだけど。

だから意地悪してみたくなる。

そろり、と手を伸ばした。

それに今なら怒られないかもしれない。

そつと、そつと。

そういうときに限って人間は目を覚ましたりするのだから、ほんと、天の邪鬼だと思う。

「あ……………え？」

「……………」

鬼男が突然、バネ仕掛けみたいに体を跳ね起こしたので、私はびっくりして固まってしまった。

伸ばしかけの手が中途半端で、思わずそれとなく頭の後ろにやって自分の髪をいじった。うん、いつもながらにさらさらでちよつと固め。なんて自画自賛をして現実逃避したけど現状が変わるはずもなく。

対して鬼男も硬直していた。目を見開いて、ぼかんと、もしくはぼけつと、私を見ている。

暗い部屋の中でじつくりと、かすかに漏れてくる街灯の光を頼りに、ふたりで見つめ合ってしまった。

動いたのはまず、鬼男君の方からだ。

「……………あ、え、いつの間に」

「ああ、えつと……………」

ずいぶんうっかりしていたものだ。真つ暗闇で見つめ合う、こんな状況不思議すぎる。これで部屋の明かりがついていて、私は座って雑誌でも読んでいたら自然に会話が始められたのに。

ああだめか、それじゃあ、鬼男君の髪触れないじゃん。でも部屋が明るければ冗談で済ませられたかもしれないなくて、

こんな部屋が暗くては、物騒なことの上ない。私はいろいろ考えながら馴れ馴れしさを演じる。服を上から羽織るように、鬼男の親戚、という役をかぶる。

「んもうー、君、寝てるからイタズラしてやろうと思って。だって迎えに来てくれるつづつたのに、いくら待ってもこないし。俺の方から来ちゃったよ。したら君、寝てるし！」

「鍵は」

よしこれでどうだと言わんがばかりに、自分の言い訳に満足していた私は何とか襲いくる脱力感に堪えた。しまったそれがあった。ダメじゃん私何言ってるんだ。

でも、まあいいか、と私はすぐに諦める。

つまり言い訳を諦めていつものように、有無を言わずにこの状況を受け入れさせることにする。

じつと鬼男の目をのぞき込んだ。暗い部屋の中で、白目が光っているようにも見える。その瞳が怯んだように横に逃げようとする。

鬼男君が目をそらそうとしたけど、させない。

その前に強く念じた。意識を私に固定する。その奥の奥、さらに奥、深いところに忍び込み、意識をいじくる。

軽く。

そうだ、だって一日分の辻褄が合えばそれでいい。今日を終えたら全部消して、そうすれば何も残らない。

だから適当で良かった。

一日だけ。

そんなの、はじめからそう決めている。

最後には消えてしまう一日の思い出を、私が覚えていられればそれで構わない。

鬼男君からもらうのは、一日分、私のわがままに付き合ってくれる時間だけでいい。

それだって、もったいないくらい貴重な、短い人間の生きている時間だ。

「鍵は、だつて君、いつつもポストに隠すでしよう？」

「そう、か……………？ あれ……………そうだっけ……………」

「そうだよ」

だから強く言い切つて、その場限りの嘘を、固定した。鬼男君は不思議そうに考え込んでいたが、やがて、すつと肩から力を抜いて呟いた。

「そっか……………そう、だよな」

そうだよ。

答える代わりに軽く微笑んで、ねえとりあえず明かりつけるよ、と鬼男君に言った。

「最初につける、いや、寝てたのは悪かったよ。でもな、勝手に人の部屋に入って、しかも電気もつけない。身の危険を

感じて間違いないだろ？」

「ひどい！ ほっほかされた腹いせに、寝ている君にイタズラしようと思っただけなのにー」

「すんなー！」

後はもう、全部いつも通り。

人間の鬼男君とその親戚である私は、いつものようにどうでもいいことを言い合つて、笑つた。

朝起きてやっぱりふたりでご飯を食べた。

もちろん作ってくれたのは鬼男君だったけど。

トーストにベーコンにスクランブルエッグ。

用意された飲み物がココアじゃなくてコーヒーであることが唯一の不満だった。

「で、今度はどこ行きたいんだ？」



「そうだねえ」

平日なのに、鬼男君は学校を休んでつきあってくれららしい。  
前は授業を優先したがったのに、なぜかこのところ、一緒にいてくれる。

それが何回前の賽日からだったか、思い出そうとしたところ  
でちょうど、テレビに遊園地が映し出された。

朝のニュース番組の一コーナーだった。特集、とかなんとか。  
来月からたくさんの人間が長い休みをとるので、そのための情報提供らしい。

遊園地にいる人は皆楽しそうで、思わず考えていたことも  
放り出して見入ってしまった。

「行くか？」

「うん」

さりげなく鬼男君がそういうので、よくわからないままに、  
私は頷いていた。

「おっしいしい！！」

そうかいそうかい。

にこにこ言った鬼男君は次の瞬間、はああ、ととんでもなく盛大なため息をついてうなだれた。

ベンチに座って二人、アイスを食べている時だった。

「なにさ君、年寄り臭い声だしちゃって。どしたの？ 老けた？」

「……………あんたは楽しそうだな」

「君は疲れてそうだね」

そりやな、と力なく鬼男君は笑った。

私はソフトクリームにかぶりついて、にんまり。ぱりぱりと、すぐにコーンまで食べ終わってしまった。

見ると鬼男君はぼけっとして、溶けたクリームが手に垂れそうになっていたの、その手をつかんで引き寄せ、なめてあげる。

「……………っ、なにすんだ！」

「何って……………溶けるよ？」

「口で言えばいいだろ！ ふつう、するか？ こんなこと」

「こんなことって」

何か変だっただろうか。

溶けそうなアイスから手を守ってあげたのだから、感謝こそあれ、怒られることはないと思うんだけど。

「……………やる」

「わあい」

そう説明したらやっぱり深々ため息ついて、鬼男君が食べかけのアイス突き出した。

遠慮せず素直にそれをもらって、食べる。

甘さと頭に突き抜ける冷たさが絶妙だった。

「……………なあに？」

「……………いや、」

それにしても今日の鬼男君は、おかしい。

どこがどう、とは言いづらいのだがとにかく。

何か、考え込むようにうつむいて、ぼけっとしていることが多い。

かと思うと、こちらを伺うように見つめてくる。

たぶん本人はこつそり、気付かれないように見ているつもりなのだろう。

残念なことに、バレバレだけど。

「はい、あーん」

「誰が」

眉間にしわが寄っている、たぶん、それにも鬼男君は気付いていない。

鬼男君はそんな難しそうな顔のまま、でも私が促すままに、差し出したアイスを食べてくれた。

本当にしてくれるとは思わなかったからびっくりした。

アイスを取り落としそうになる、それを、私の手の上から手を重ねて、鬼男君が支えてくれた。

「ほら、落ちるぞ」

「う、うん。どうも」

不意に泣きたくなった。理由はわかりきっている。

うれしくて楽しい。

いっしょにいられて、幸せ。

こんなに私を弱くしてしまえる存在を他に知らない。

泣きたいぐらいに幸福なのだと、胸を張って宣言できる。

「でね、私、このあと乗りたいものあるんだけど」

「まだ乗るのか」

「あつたりまえでしょ！」

全制覇したいくらい、といえれば手加減してくれと言われる。

その様子がおかしくてまた、笑えた。

こんな調子で今日もまた、ただ楽しいだけの優しい時間だった。

それだけで終わるのだと、思っていた。

たまに上の空になる、そんな鬼男君の様子を抜かせば、本当に楽しくいつも通りの一日だった。

コーヒーカップも、ジェットコースターも。

着ぐるみのキャラクターもお店のごはんも。

だから今日もいつも通り、楽しく終わって、さようなら。

いつものように別れて、忘れさせて。

思い出だけでもらって、今日を、終えるのだと思っていた。

空が端からじわじわと、朱に染まる。

夜の藍色に変わる柔らかいコントラストがきれいで、思わ

ずほうつと息が漏れる。

あの世の変わらぬ空では見ることの出来ない時間の巡りだ。

子連れの家族などはもう、少しずつ帰路についていく。

「もう、帰ろっか」

言い出したのは私の方から。

鬼男君は上の空のまま、こくりと頷いた。

いつもは断る食事の誘いに、頷いたのはきつとさみしかったからだと思う。

鬼男君との時間はいつでも楽しい。鬼男君が、隣にいてだけで。

だけど今日は格別だった。遊園地とか、行ったこと、なかったし。

騒がしい場所だったからこそ、藍色に沈んでいく色調を見ていたらふと、風でも吹き抜けるように胸の奥が寒くなった。体感気温は変わらず今日も蒸し暑い。それでも、胸が、かすかな痛みを孕んで震えそうだった。冬みたいにな。

まだ帰らなくてもいいだろうと、少し強引に、鬼男君らしくなく言い切った顔が赤かった。

夕日のせいかもしれないけれど、そうじゃなかったらどんなにか。

「いいよ」

連れてってほしいと思って、その思いの強さにきつく目をつむった。

胸の奥、吹き込む風が冷たく荒れる。

「君が連れてってくれるなら、いいよ」

連れ出してほしい。

さらってほしい。

このまま、他の何者でもない。

職務とか立場とか肩書きとか、全て下らないものと言いつけて私ごと何もかもさらってほしい。

帰りたくないな、と。

はつきり思って、せつなくなつた。

鬼男君が私の手を掴む。

力が籠っていて熱く乾いていた。

思い描いていたよりも、大きく薄っぺらい手のひらだった。

「やっぱりどうしても……………今日、帰るのか？」

「……………」

ため息が、苛立っているように聞こえなければいなくなってしまった。

怖いような沈黙の中、ぐいぐいと私の手を引っ張って歩きながら前を向いたまま鬼男君が言ったから、答えたくなって、代わりに息を吐いていた。

鬼男君の家の近くまで戻ってきていた。遊園地から、行つたときと同じように電車を乗りついで。

ぐいぐいと腕を引かれて歩く。近所の住宅街の中。ほんのり明るい空に夕日の残滓はもうない。ただただ、これからは

もう暗くなるのを待ただけだ。

夕食の支度のおいがする。母親が子供を呼ぶ声。はあい、と答える声。

道には人の姿はなかった。私と鬼男君と、二人。生活の気配はどこか遠くの出来事のようなのだ。今、二人きり、切り取られた場所にいるようだ。

「ごめんね」

答えになってない答えを返す。

ずいぶん残酷なことを言うね、とか、一度くらい言ってみなかった。

本当は。

食事ではなくて、今日も泊まっていけよ、と。

まるで何でもなしのように、鬼男君は言った。

実際なんでもないことなのだろう。今の、鬼男君にとって、は、

鬼男君には事情がない。私みたいな約束がない。

賽日だけ、という縛りを知らない。

ただ巻き込まれて、付き合わされているだけなのだから当然だ。

勝手に悲しくなって苛立って、ひどい、と糾弾したがっている、私の方がよっぽどひどい。

鬼男君は何も悪くない。

「どうしても？」

「俺にも俺の事情があるんだよ」

「明日は土曜だぞ」

「さっき聞いたから知ってる」

鬼男君の言い分はこうだ。今日は金曜で明日は土曜。当然、明後日は日曜日になる。

せつかくの連休、せつかくの遠出。

だったら何も急がずに、いくらでも泊まっていけばいいと、何のためらいもなく言ってくれる。

………そう、できたらどんなにか。

「どうしたの。君、今日はやけにこだわるね」

泊まってけよ、と。

断れば、いつもだったらそれで引き下がるはずなのにそうじゃなかった。

そんなに私といっしょにいたいもの。

そう、からかってやりたかった。

簡単なことだろう。いつものにやにや笑い、ふざけた態度。

軽い口調。

そうすればきつと、恥ずかしがって苛立って、ちよつと乱暴に言い返してくれるはずだ。

簡単だ。

「そんなに俺といっしょにいたいの」

その、簡単なはずのことがうまくいかなかったのもきつと、泊まっていけよ、と言ったときの鬼男君を、思い出してしまったからだ。

夕方の滲む空を背景に、やたらと真面目で切羽詰ったような様子だった。

なんだか必死そうに見えてしまった。笑えるくらい。

可笑しいな、君、だつてそんなこと、言ってくれるようなキヤラじゃなかったでしょう？

そんな、祈るように、すがるように。

違うでしょう。本当の君は。

だつて。

どうしてこんなことを鬼男君が言い出すのかわからなかった。

なんでそんなにこだわるのか、そんなに必死なのか。

「話があるんだ」

人通りのない道だった。車の行き交う音も、どこか遠い。道の交わるころだった。四方を見回しても誰もいない。だんだんと暗くなる空の下、明かりを灯す家が点々と見える。

タイミンク良く、街灯がまたいた。

たーたーたー、と遠くから、時間を告げるメロディが響いてくる。

「馬鹿にしてもいいし笑ってもいいから」

俺だつてこんなこと、突然言われたらきつと信じない。

それでも。

鬼男君はそこでうつむいてしまつて、二人分の沈黙が重たかった。

立ち止まって、向かい合っている。

車なんかを通ったら危ないのに、ここには他に誰もいない。向かい合つて、どうしたらいいのか、持て余している。

ふと、気付く。

そういえば、鬼男君はもう、私よりも背が高い。

「……………悪い」

掴まれていた手を離されて、それをどうしようもなく物足りなく感じた。

触れられていた部分がひどく寒い。

鬼男君は空いた手を、ポケットに引っ掛ける。うつむいて。

信じられない話を、した。

頭が痛くなるくらい、奥歯をかみしめてたえる。

足元には街灯のぼやけた明かりで、薄い影が落ちていた。そこに、涙を落とさないように必死だった。

だってこんなの反則だ。

どうやったらこんなことを、予測できただろう。回避出来ただろう。

いけない、思う。

そんな、なんでどうして。

そんなことがありえるのか。こんなに何度も何度も、嘘を重ねてきれいに消して。

それに逆らうなんて、抵抗するなんて。

鬼男君は話し続ける。聞いていられない、それなのに、鬼男君の声はやさしく鼓膜を揺らす。頭の中に沁みこんでくる。容赦なく。

身震いする。全身が歓喜に震えていたけれども、いけない、これを、受け入れてはいけない。

だって鬼男君は鬼男君だけど、そうじゃないのだ。巡ったのだ。新しく生を受けて。

捕らえてはいけない。手に入れてはいけない。

今や私の思考を占めていたのは、こんなことをするんじゃないかという途方もない後悔だ。

一日だけと考えたのが甘かった。そもそも、きっと初めから全部間違っていた。

鬼男君を縛ってはいけない。

私から、自由にしてあげなければいけない。

鬼がいると思うか、とまず、鬼男君は話し始めた。

突然のことに呆然として、答えられない私にさらに言う。

閻魔大王を知っているか、と。

それから、鬼男君が語りだす物語。

聞いた瞬間、鳥肌が立った。涙腺がゆるむ。だめだ、思っ  
て同じようにうつむく。見られないようにかたく目をつむり、

「僕は………!!」

ぱつと。

背伸びをして、両手で鬼男君の口をおさえた。触れた唇がかさついていて、柔らかい。ずきりと、はつきりと胸に痛みが走った。

「だめだよ、もう、それ以上は」

目を見なければいけないことが辛かった。

それ以上に、このまま鬼男君の言葉を聞いてしまうことが怖かった。

もう、どこにも帰れなくなりそうで。

怖かった。

だからもう、いつものように。

言い訳を諦めて。

意識を縛ることに、した。

そつと、鬼男君から手を離す。一步、ゆっくりと後ろに下がる。

手のひらは鬼男君の前にかざしたままだ。

まずは、言葉。

ぱくぱくと、鬼男君は口を動かしたけれども喉は震えな

つた。

もう、何も紡がれることはない。

もう、何に脅かされることもない。

安心して絶望した。

鬼男君はなおも口を動かして、苦しげに顔を歪めて喉を押さえる。

喘ぐように息を吸う。

「私はね、鬼男君」

泣きたかった。

鬼男君を、苦しめることしか出来ない私自身に。自分自身の愚かさに。

「その先は、聞きたく、ないな」

そうして最後に意識を奪う。

膝から崩れ落ちる体を、腕を伸ばして、必死に抱きとめた。



本当はね、鬼男君。

きつと、私。

思い出してくれること、期待していたんだよ。

そうなればいいと思ってた。

幸せになれると思ってた。

………間違いだった、みたいだけど。

だって今、私。

………こんなに、苦しい。

溺れる様に夢を見る。

夢のように、思い出に溺れる。

「ねえねえ、じゃあさ、こっちはどう？」

「どうって………」

思い出したのは半年毎の、鬼男君と遊んだときの記憶だ。

例えば買い物の途中、鬼男君の好きそうな色のシャツを選

ぶ。

でもそれは今の鬼男君の手持ちにはないデザインだ。  
それでも鬼男君は意外そうにへえ、と呟いて、私の勧める服を見る。

「………うーん、これなら、いいかもな」

こつそりと、にんまりと、私は笑った。

今の鬼男君の手持ちにはないデザイン。

でも、知ってる。

私は知っている。

鬼男君が知る前に、鬼男君の好みを知っている。

それを教えてあげると、鬼男君は静かにうれしそうにする。

そんな鬼男君を見て私は、生まれ変わっても好みが変わっ

ていないことと、鬼男君より先に彼の好みを先読みできたこ

とに、得意な気分になったのだ。

ずるいって、わかってたけど。

うれしかった。

「ちよ………さわんな！」

「いいじゃん、ちよつとだけ」

例えばふざけて、ふざけた振りをして、鬼男君の頭を撫で  
てみたとき。

角のあった場所に掠めたときに、鬼男君は片目をすがめて  
くすぐったそうな顔をして見せる。

私は適當さを装いながら、何度か、その場所をそっと撫でてみた。

すねたような、どう反応したらいいか困ったような様子で結局じつとしてゐる。

懐かない猫のようだ。まだ慣れてくれない、でもひとりになるのは嫌で、どうしたらいいかわからなくて、困っている猫のよう。

同じだった。

鬼だった頃と。

私の側に来てくれた頃と。

同じだった。

だからきつと、もしかしたら、と。

下らない期待を、それでも捨てられずに抱いていた。

全部間違いだっただって、今ならわかる。

ようやくわかった。

最初から、全部、全部間違っていたことが。

本当に自由にしてあげるなら、二度と会わないのが良かった。

なんでで会いにきてしまったのか。

報われることない思いを持て余す。

私は私のこの思いを、いつそ殺してしまいたい。

抱えていた体をそつと、ベッドの上に横たえた。

鬼男君の部屋、明かりをつけてないから昨日みたいに、沈

みこむように真つ暗闇。

鬼男君は弾むような呼吸をして、ぐったりとしていた。

私の使った術の反動だった。無理やり意識を縛るだなんて、

強めの術を使ったから反動で熱を出している。

人間の体は弱い。私に比べても、鬼に比べても格段に。

脆弱で、鬼のようにはいかない。

鬼男君はもう、人間、だから。

「……………ごめんね」

額に口付けて、熱を吸った。少しでも楽にしてあげたかった。

弾むようだった呼吸が少し落ち着く。苦しげな表情がやわらぐ。

んん、とうめき声を漏らして眉間にしわが寄った。

緊張して見守る中で、けれども目を覚ましたりはしなかった。

ほつと息を吐く。

安心したのか、落胆したのか。そんなことさえもう自分ではわからなかった。

ベッドのそばに膝をついて、鬼男君の寝顔を覗き込む。

ためらわずに恋しい指先を鬼男君に触れさせた。

わずかに汗ばんでいる額に触れて、こめかみまで辿らせる。

さらさらと髪を乱して、角のあった場所に触れてみた。

鬼男君の反応はない。

寝ているのだから、当たり前だ。

「だって会いたかったんだよ」

呟いてみたらそのまま、泣いてしまいそうだった。

こんな思いは何度目だろう。

鬼男君のそばにいと、どうしても弱くなっていく。

どうしても。どうしても。

巡ってしまった君の、魂の形に触れたかった。

こんな風に近い距離でいたかった。

叶わない思いだ。許されない願いだ。

どうしても願ってしまったのか。

呟いてみたらもう、それ以外に答えなんかなくなっていて、救いようのない愚かさについてそ笑えた。

それでも、最後にしようと思う。

だから、お願い。

最後だから、許してください、と。

寝ている君に、口付けた。

「さようなら」

寝ている君に、お別れを。

置いていかれることばかりの私だったから、置いていくのは、初めてだった。

きつと君は、置いていかれたなんて思わないだろうけど。いつそ私のほうが、また、置き去りにされた気になっている。

離れられなくなるのが怖くて、もうどうしようもなく、一思いに一気に空の高みに飛んだ。

ここなら誰もいないからと、帰る途中の空の上、黒い空から明るい地上を眺める。

その中に、最後だからと、相変わらず往生際の悪い言い訳を捏ねて鬼男君の部屋を見つようとする自分に気付く。

呆れてしまつて、目を閉じる。

思いを断ち切るように意識を切り替える。

意識を澄ませて時の刻まれる音を聴く。

昨日と今日の境が混じる。

今日と明日の境界を、跨ぐ。

魔法は必ず解けてしまうのだ。

あとには灰しか残らない。

その灰を集めて、愛でて涙して。

それだけでもう、幸せだと、思わなければいけなかった。

許されなくてもいいって思った。

きつとただの強がりでも。

嘘、嘘々。

大嘘でも。

……許されなくて、いいです。

だから、どうか。

忘れないで。

そうやって、川も越えて、私は、私に帰っていった。